伊勢參宮名所圖會

附録

一上

伊勢參宮名所圖會附録

目録

△長等山 名所 △三井寺 園山教待の事・寺門堂・祖堂・中興祖智證大師堂・小堂・観音明神・南堂・正法寺・札所観音・地蔵堂・三重塔・英霊堂・天社・弁財殿・三栖杉・御影川・亀口杉・亀ヶ岳・文殊辻・多度水・尼ヶ池・子園子・十八神・食堂・閼伽井・月見池・五名水・村雲橋・影達・古達・弁慶・食堂・経堂・筒井原・多賀・多賀流羅・女人三平清・三流・三級者

五別所

△微妙寺 別当堂 某師堂 △近松寺・如来堂・子神佛・縁名号・獨鈷水・達樓・菩提樹・安徳和尚石塔 △尾蔵寺・芝法阿闍梨墓・一神三面佛・地尾八幡・源八社

△常在寺 △水觀寺

△湖水・月讃・行基・弁才天・松室仲基仙童・琵琶の事・多賀橋・沖ノ島・水茎園・徳山・松原橋・長命寺山・八幡山・黒津・白石・支那・おつ月嶌

△湖中松 △月 魚 △俣 言 △湖上風土

△月産物 △月洲嵜 △月瀧 △月山

△月八景 △月神社佛閣 △古城 △月陵墓

△日人物・佐〻木・浅井・蒲生・織田信長・古閑秀吉・傳教大師・親鸞聖宗・大石玄良・小村季吟・僧元政

△猿丸大夫旧跡　△余五湖　△錦織里　△志賀坂郷・赤塚光西寺・見世・彰左家

△大津舊都・天智天皇の御宇・文武天皇乃宮殿　△志賀山城　△貫之祠　△黒主祠　△志賀山中城趾

△志賀寺舊趾　并上人の御息所の住寺　△完志　△日舊都

△茅松院旧跡　△芙蓉原　△坂下　△元芝如堂

△十王堂　△明智寺　并法古城　△大撞観御廟　△滋賀院　慈眼大師廟三佛堂

△榊宮

△日吉山王七社　并　構屬十四社・末社・嵐発倉　并　牧場　法師の宇

・衣掛石・佛院・七猿和歌・白髭院石窟・漢語石・爰妙院・御松石・明星水・元三大師堂・大政所

△日祭禮・榊還御の紀列　并　御輿振・七本柳・松中濱御ヨミヤ

落〻等の細記　△両社明神　△明智城跡

△唐崎　日明神　并　孤松の古記・日祓。山王松中供御

△西教寺　△比叡辻　△来迎寺　△苗蔕

△雄琴里　△堅田・湖月亭・多体佛・観音堂・衣川山天神　△和尓

△芦野入江　△比良山　日獅子谷　八系　△小松濱　揚梅　渕

△瀧岩　△白髭大明神　△歩下里　△大溝

∠此一巻は大津より左の方三井寺山王附湖中湖上の梗概

長等山 三井寺より志賀の山越までの名を但し盛衰記にはひゑいの山ながらが長柄ともあるが図中の山は惣名とも又ならず者ながらも撮ぶくして古歌に証けり

後撰集　作らざりける人に年月へけるとて
めづらしき君ながらの山乃井の洗め和てそ栖果たる　読人しらず

千載集
さゞ波や志賀の都はあれにしをむかしながらの山桜かな　仝

三井寺は那此山中に在其外名區名石多し
〇峯といふ山上より〇えまが淵〇大舩小舩の淵〇児石〇子石岩〇赤龍宮〇修行坊坂〇護法堂地〇花の谷〇仙人水〇地獄谷〇まつし谷等

三井寺 長等山中にありて園城寺といふ又三院ともいひ総稱を寺門といふ
元亨釈書に曰園城寺は大友与多の建る所なり 与多は大友皇子の孫なり天智天皇の御子大友皇子天武天皇に戦ひ敗れて勢田に薨じ給ふ故先非を悔て御子与多に命じて大友連綿の宮城を毀ち造営の資とを
其神めは天智天皇大友の皇子に勅して志賀寺崇福寺を営に擬しめ給ひし帝崩ありて又本の地へ還遷さる其跡の地なり
其後天安二年円珍法師唐国より帰朝して傳来の経籍を尚書省に蔵む于時新羅明神形を現じて曰我この日本に経座をたべき地を与へり

願くは汝官廳に聞て寺院を建て其経籍を安置せよと那山王權現もともに円珍を引て此地に来り園城寺僧の在處を問へば忽老比丘一人来て曰我名は教待齢一百六十二也傳聞此寺の成就は我生前の二十年にありて今也其檀越の孫あり 材椒衆て傳道に あつまる五郎といふ とて大友氏を呼びて円珍に會遇せしめ其のちいかさけして失ぬ此によりて大友氏円珍に向ひて曰今日師のきたるに来り給ふまでく教待の志あらしに知らりとて便ち寺の境地の契券なりしを 證文 得せしく円珍に授く円珍又大友に問て曰此寺を御井といふは何ぞ故ぞ答て曰寺の西岸に泉井あり是天智天武持統の三皇降誕の時此井の水を掬て産湯とせし故に号く円珍是を見て又地の形勢をかんがみ唐の青龍寺に似たりとして新羅明神の経座を置くとし又未来弥勒菩薩のしかれども三皇の浴井を三部灌頂の閼伽とし慈氏三會の期に至るに比して御井を改めて三井寺とし
武云御井とは産湯のことにあらず天子の御料に供ふる五ヶ井などの井をさして御井といふを三ヶ所にとり後世の武とは御井に天智帝の時よりかくいふ事なり其三皇近江に降誕を 定め一字を造りて唐坊と號け今唐院といふ
経籍を安置を是より園城中興開山とはなれり 教待円珍の傳は元亨釈書に見ゆ 然るに人皇六十一代一條院正暦四年の冬より神とりして度々の回禄あり七十二代白河院永保元年六月戒壇堂の論によりて叡山の衆徒等おしよせ發火して堂宇ことごとく焼く
やけて後住み坊をそひやうによめる
住みなれし我ふる里はけぶりやなさちがへ鵜鳴くらん　行尊

三井寺開山教待

天智天皇遷都の後佛刹建立の
奮意ありとの聞えも未その
勝地を得給はざる二月三日
此夜の夢に乾闥婆さし
て靈區を奏ずと夢見
給へる夢を押して村を
大石石川忠兵等う
勅して色を拵拵せし
むるに山中瀑布の侍る
優婆塞を尋ね捜ねう
不絶向へども夢にみるの色
其容止日頃の者にあらざる
是必乃土なるべしと奏し
給へば帝夢のをもひ合
せ給ひて即其者に紆者
あり急く大内皇子に
命じ給ふ

精舍を建しめ給へ
号て崇福寺と
いふ武は建福寺より
後ろ又地福院これ
志賀寺の殿基なり
して三井寺
神鏡の古名
なり

○七十五代崇徳院保延六年叡山より三井寺を焼○七十八代二条院長寛二年又々山門より三井寺を焼八十代の御時源三位頼政高倉の宮をすゝめ奉り謀叛を三井寺御味方せしによりて入道相国清盛の命として知盛忠度に三井寺を討しむ夜に入て火を放ち堂舎塔廟六百三十七宇大津の在家一千八百五十三軒智證の渡し給ふ一切経七千余巻仏像二千余仏悉く焼はらひ院の長吏円慶法親王天王寺の別当をも留らる其外僧綱十三人闕官せられ悪僧には筒井の浄妙を始めとして三千余人流されたり（平家物語）○八十四代順徳院建保二年叡山より又三井寺を焼其後ちに将軍実朝公建立○八十九代亀山院文永元年又叡山より三井寺を焼大津までも火を放つ○九十代後宇多院弘安元年五月十二日供養あり同六年山門と天王寺の別当を争ひ合戦に及ぶ○九十二代花園院文保二年四月叡山より又三井寺を焼此時護法を山門へ奪○九十五代山門の衆徒後醍醐天皇を擁護して義貞と共に合戦を致三井寺に引退くにつゞいて山門の大衆二万余人院々谷々へ乱れ入堂舎仏閣に火を放つ三井寺の衆徒は金堂に走入て猛火の中に腹を切坐敷をならべて歯を食しばり倒をうつ月計の合戦に大津松本三井寺に討るゝ者七千六百余人とぞ此時金堂の本尊の生身の弥勒ふて落らせ給へば角ていはじとて衆徒御首計を切て薮の中へ隠し置たりけるが多く討るゝ兵の首共の中に交て切目に血付たりければ凡て山法師やあつかりて大札を立て一首の歌よこと書ともへりける其文曰

建武二年の春のころなと申さんみのさかしき事ありけるに三寺の

あつさにかゝりぬるを申らんにでさらば八相成道の済度利生せんとおもひく金堂の方へ立出られけるが業火さかんにもえて修羅の闘諍四方に起へこれはいかにぞとおもひ煩ひて居させ給ふ仏地坊の某と申ノん金堂内へ走り入て不思議もなく頭の御首を切し間アイタゝと云ども叶はざ堪兼てすりましをその中に投すひてげたりし

山法師が欲とはいふぞおひぬる寺法師にぞ首を切らるゝ　金堂弥勒

これまで叡山の為に焼る事九ケ度也此外火災たびたびありて後天文二十一年九月五日江南大津四宮神事より起て観音堂と三井寺筒井大門山上山口三方に数ひく合戦を実に盛衰は時勢といひながら草創より凡千年の間実に十度に及ぶ其度を見ど猶も今も厳然として其一場を開きたる仏法不可思議の謂実にありがたき事と云べきなりけるべし

○寺門四至の境堺は　東は神出村新別所　西は藤尾如意嶽　南は三別所會坂山　北は志賀のん世

是古書に見へたれども継古三十五万石の境堺にあらず今は只一ツもみへず今寺山の西の方に大門より入る東は継古の大門のありし由にて此の石郡より十八町南阿星山尼寺より古の惣門ありしといふ又小の山上に如意嶽あり仏堂僧舎の跡歳々これを三井寺の跡とこれが古の如意寺志王城の東門に当る故に正南山ともいひく三井寺より西濃東の康谷に至る数一歩縦横廿里南は藤尾に至て小野別志賀山に接を其間堂舎僧坊魚鱗のおとしうつなる又云二階楼門ありこれを円城寺の西門といふ左右回廊門の南に瀑布ありよりて楼門の跡ともいふ山鬱○これが湖水をうらにし志賀郡栗太郡野洲郡の三郡に跨りその往昔凡五里ばかりとぞくべく叡岳に対るなるし南谷の古は一百六十坊なりしか今十九房なりしもの後にもえらるべし

○祖堂（開基の祖教待）金堂の後にあり人定の地なり云○傳曰優婆塞教待居士い伯國の人なり居住して堂前に久しく開基の寺院なりと云ど開基の寺院は他国にもありて此等に奉仕し湖邊に出て魚鼈を釣りたりしとき一百六十二年縁に寺門を開き附属し背板にて嚴敬に帰く其石窟に詣る魚鼈の骨悉く蓮と化し三宮威嚴縁に拠師に国毋の位に阿弥陀如来と食と其骨悉く蓮華と化し後に

聚めて堤を築き不思議甲香餅に変り国聚と其地に飛昇あり教待老に志を問ふ博姑村の教恵に道士ありて仏法の門に入る

但し教待三年寺より其別所に移る路東に山の林業をなすに昔の猟者集滅道の願あり亦に今に至りて其名称地に今渓谷を分て毎年十月十日祭を

○智證大師堂　中興開山の祖○大師尊像智証彫刻日遺骨を納むこと唐院

宿坊香養坊智法の園林の謚を大師に和氏ふ　て漢民那河郡の人父は宅成母は佐伯氏弘法の孫なり弘仁三年の除誕なり眼に重瞳を現し天資聰敏幼にして老成の量あり叔父金倉寺に師事し武義天女来りて

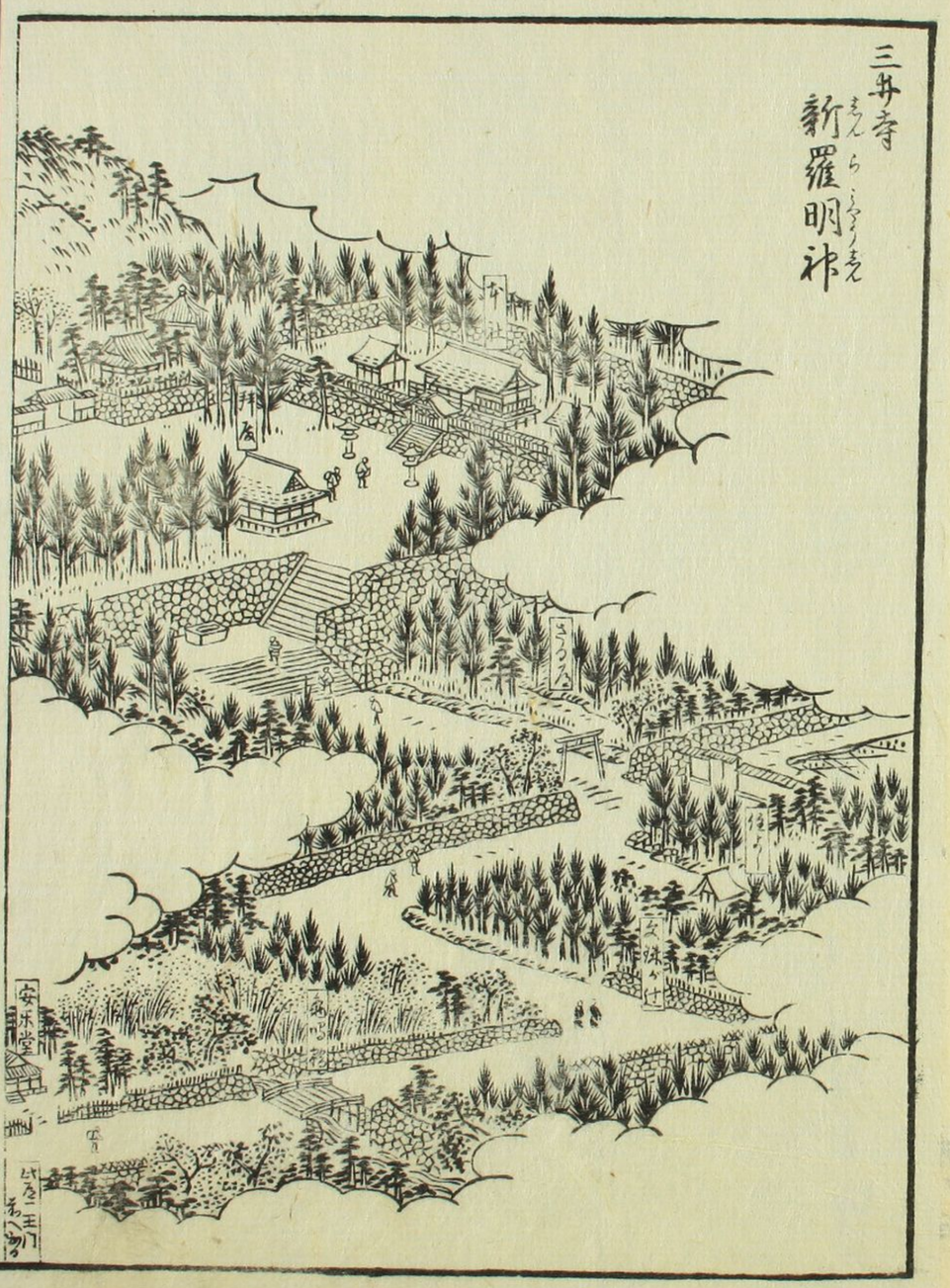
殘る其所多八歳に至て索て因果経を讀て感涙を

十歳にして能經魯論史文選を讀十四にして孝経を讀て仏説を

去て年十九にして羅漢山に入て義真を師と

の商人欽良暉に便乗して海に泛ぶ　掉の弱

三井寺
新羅明神



三井寺園城寺
大師堂
山王
大杉
くまの
八王堂
三モン
円満院宮

三井寺
正法寺
札所観音

のうれ私として紀氏ぞりろくくの神も佛も我とさそ又
分十又日唐の鑒南福弘興又弘くく大中九年長安寺弘法寺入又興岩寺三
義又見悉く法華を一遍を保和の後三年寺又寺弘法寺 同十二年基又高人李延寿
又役れして保和を 岩海天安二年 即所得の古宝の密義及び諸宗経書一々巻尚
書者又絶む此又抑い〻勅〻て唐院を図城寺又嘗ミ唐来の佛像経籍佛舎
利大日金の冠銀の芝鞋灌頂の具釈迦金棲の架裟法華弘安弘〻て
他法灌頂の乃場と成宝又抑い〻三年の修基再び記まり年又十二月て
延暦寺 叡山 の座を立ちめる徳義厚く王法の師範と名さる寛平三年冬十二月
廿九日寂を竟又叡山南谷又葬る其遺骨を唐坊又納め延長又年冬十二月
智證大師と謚を 日吉宮和尚よそ九百年又及べり今又年く独を九日青より大唐坊又登う大師の新事代同さ一日一族使論あり て後法華を修をこれを学又大師 の 遺骨 の 左 又 あり
智證大師の前 の 左 又 あり 入唐の時風記りて擂を揺く其擂をんて彫刻し
○黄不動 大師の前
金色又かえく黄色成彩る成又号く 流三日大師の維佛学又 皆黄色之とかり
○三重塔 大師堂の右に乃 お軍家御建立 本尊釈迦文殊普賢 ○村雲の橋 門前の左又乃
○五社 彩羅明神 ○三尾明神 ○護法岩神 ○彩宮権現 ○十八神 已上
○彩羅明神小流現立谷の社座之祭神素盞嗚命 本地文殊之素盞嗚命
又十猛神と師て彩羅国又乃る国弘保和の時其船中の教籍と擁護し

て此朝へ乃る三井寺又流をくく成又成れを彩羅とく又明神宮又
現立を成又此乃成現立谷と云 必光あり成 弘れて中ろ成南面又ろ成を
然九月明者始て祭祀を今も九月廿一日依竹家より供物あり
俗名成宋記抄
かく私又のうれちりとこうひいろ物をとれとまりて
彩羅法楽の歌の會又後朝寝貝の春あり成れより今又乃りて歌の法楽を供ぞる
立式と成り部兼邦が説乃神社誓蒙又及べう 兼邦
彩羅より三井の流と母ぐりきて歳之位べき神の名を
相殿 ○叔若 本地十一面垂跡 後妃 ○宿王 本地釈迦垂跡 天照大神 ○宿王御子 本地羅漢垂跡五十猛神
三柿板 附言 明神の霊を委乃なり 彩羅 ○御彩川 明神名成
武日保孫守頼義が男寺又入く僧乃ぬ西蓮坊は養乃と成子義光神明又つく人
て名成彩羅三郎と称を甲湯若成の両武田信湯奥成依竹平賀安田小笠原加賀
美名号く源氏の社神とと乃る者義乃れ又ろろ九月十九日法金修紀して成りへ成
ミうこれを彩羅會とと乃
○慶右幸説曰 三井寺の彩羅明神乃やんごとなき神と宇治乃御神の子又和尚毫阿闍
梨乃ろ乃ろ宮殿の妻戸より御出衣の袖乃ろ出ろう袈裟の中又入り給乃ろ成
乃成屋乃ろ乃ろ延久の焼亡の時梨本の座之の時梨本の座之の涙乃成ろうんと成ら成れば又十丈及びて
其中又溝ありそれ又寺山法師追捕せら成ろ小坊く宮殿の中へ逃げ入りけれ
○後冷泉院の御時世間さわがしかりける年又ろびの図の逆ろ又社をほろぼまんとす

永承年中兵衛府生時重を代て六衛府のりのぶも社を造り神霊會彩の
ゆ〻し祇園の中ゝ

亀鳴橋　○亀ヶ岡　小流の名

後拾遺集
万代まで代をうつさゝくいのうゝ亀の岳なる松のこゝろは　式部大夫資業

此亀ヶ岳後冷泉院の時大嘗會御屏風に近江國亀ヶ丘の松の樹多生ゝ云画歌ゝ是三井寺の住
僧覚源ヶ述　○安楽堂　小流の中あり此石塔ゝ有て其石ゝ径五尺あり是を以て乃
此所に人の往来禁ぜ云其一石の事也

○三尾大明神　南峯琴緒谷の社ゝ尊氏再建　○煌根　○伊弉諾　○日霊女
ゝれを三尾の神ゝ云ゝ白尾赤尾と称をゝ云此神三尾の自地を生て
ゝる後の水尾ゝ大津の浦ゝより其浦と大波止ゝ寄給ゝ云て社ゝ三社ゝ
但し五ゝ神楽の石あり天人降て琴を弾く故ゝ琴緒谷ゝ云ゝ
毎年三月中の卯ゝれを撃ゝ鼓ゝ三石ゝ鼓を○琴尾谷　赤尾　○筒井谷
白尾　○鹿関　五尾

○讃法谷神　中谷の社守ゝ又尼護法谷神ゝ也ゝ護法谷神ゝ
西方の美人ゝ云ゝ護法産福ゝ
○尼ヶ池　二宮門のうしあり谷神尼　○尼ヶ池　毎年　四月十六日　此谷神の御幸をひらきて法味祇薄むゝ諸人園
ゝ園ゝ
ゝを請て渡ゝの祈願を終ぐゝて近郷より群参を

○彩宮檀現　神出村の社ゝ也　又月ゝ日神ゝ乃山ゝ檀現ゝ天安二年　智徳彩羅
ゝ山ゝ寺ゝ建ゝ彩羅寺ゝ止ゝ山王ゝ叡山ゝ帰ゝ
彩羅の地ゝ社ゝ立ゝ寺記ゝ曰天喜二年園満院明尊此宮を心の薬ゝ
遷ゝ出ゝ園て其巷を呼んで神出村ゝ云ゝ改めて彩宮ゝ云ゝ社の地今知
菊ゝ

○十八神ゝ南谷符牙の社守ゝ伽藍の守護神ゝ氏建る　已上五社

○熊野權現　廚伽牙の傍ゝ　傳曰平治元年長更弟大僧正紀芸の勧請

○住吉大明神　小流の社守ゝ文永ゝ年　淫雑僧正の勧請

○金堂　廚伽牙の源ゝ　本尊弥勒佛　南向に間に面流牙長ゝ息女
薩と遷ゝ廚ゝ
其長一丈六尺　○二ゝ檀古天皇勅佛　三ゝ聖武天皇の意制
砂金ゝ百両を積て鑄ゝ長八尺四ゝ紀基菩薩自作羽佛　長ゝ五ゝ御堂関白
道長の本尊銀の像　長七寸二分　六ゝ大職冠拾志の本尊　七ゝ仏人未詳金像

○廚伽井　三年ゝ金堂西階の地ゝ立て金堂ゝ
仏辺畫廚ゝ霞ゝ廚内の彼板龍の画ゝ古法眼狩元信ゝ甚ゝ帝　○廚伽ゝ浄水の梵流

村雲橋

三井寺智証大師此橋の上より
のぞりて西方大佛剃の同様と
おもふ〜即西方を向て瀧水の
印を結び給へば忽一塵の雲
起りて寺〜西方を蔽ふ
其後智証の後者を度
び同様に雖而のたもう
遠く消滅せりとぞ

○月見池　○鐘の池　共に三井の傳へあり

○無名塊（金堂の前にあり）　天智天皇此基地平均の時顕はし光掘あり即其下に水もりに入る

の宝譯又天の白石を得たり宝を石帝左の名名指（名指いわく）を折てもにこの

塊幢石壇の下に埋納む所又無名塊（時のうつり）と去年記の文い画のよ

○古鐘（金堂の傍に立りこれ秀郷龍宮に沒る所と云伝へ焼抜ちて以

おもく　武云年号のみ　古鐘なれば今の世に

止めし物なれども古鐘なれば今の世に

其例多くもなり　組　龍宮の抱ずうに付く又一説あり。江湖抄曰者栗津冠

者とは江の栗津に廣江寺を建る佛殿諸堂成就の入鐘を拵んとて鐵を出

雲の國に求む路に悪風吹て船を西海へ入ることを附に者に一人小舟を掉ていく我いれ

小龍王月ごろ我春屬を大蛇の子に食られぬ今汝が勇力なる我知つてかくこと遠うて

秋くに其敵を我ともに亡べし　冠者答ていまぐ絶らぬ小龍大蛇の事に我ともに冠者これと

ゆりてこれを廣江寺に納むかくて其鐘消滅して其身を絶て彼境に抜ちびらぐ一人の侍のこをのこせり

其つ時に守府の軍清衡黄金百両を賞として三井寺に寄ると中ごろ鐘を三井寺に奏ると中ごろ

嚴島の宋寺に〻〻其法三井寺と云所の中ごろ鐘を三井寺に奏ると中ごろ

廣江寺の傍に湖あり　廣江寺田の字に沈りて中寺の上にあり

名書　さざ波や三井の古寺鐘いあれど昔に人の聞きもとめへど　宗因

○新鐘（金堂の傍にあり）　文禄年中大閤秀吉公建立ところ

鐘の記文に曰

請特蒙十方檀那助成修造江州三井寺之堂社狀

伏惟阿難尊者傳持佛法悉壹釈尊教勅為濟度衆生也。優填王刻如來尊容

亦任金口之附属為利益國家也。抑當寺者天智天武持統三代勅願之精舍

教待和尚草創也天台真言俱舎三宗兼学之練若智證大師再興也。右八功

德之水和修吉龍王所掬矣。為無熱池之流奉　天子御産湯焉依之玉躰無

恙叡運無頂自余稱三井寺。佛法繁栄日尚矣。於此乎。生身弥勒降自都率結

三會値遇之縁天竺名鐘出自龍宮鎮唱諸行無常之理。倩考古記温来由須

達長者建祇園精舎十大弟子鑄四方梵鐘今此寺之鐘其隨一者乎。或時顕金

胎両部諸尊或時現三世諸佛相好。加之天下有凶年則汗流霑漉民問謳太

平則音澄響高傳。□一度聽鐘聲永免三悪苦熟人不運歩何輩不拜之就中吾

大師者大聖不動變化盡真言上乗密義救世觀音示現窮天台法華淵源平

剰准釋尊苦行攀大嶺葛城之嶮岨覓役優婆塞跡司熊野山之撿校障者降

伏之勅□矣招福之祈霊験追日新法威無落地矣然間四海安全併任三井

懇祈王法長久偏依大師法德寺門名譽不可勝計者乎唯恨建武之昔焼失

七百余宇為凶賊都為焦土暦應之古造営一百有余亦為雨露頽毀悲歎無

限愁鬱幾計矣爰某忘躬不堪捧一紙化書意馬急鞭敲十方檀門信心貴賤有焉

則布千金万斛道俗尼女無焉則施一紙半銭宛如不厭巨海於万流頗等不

嫌大山於片塵若夫脩造功畢結縁隨喜辟類現世安穩而者千祥万吉自由

自在渴仰皈依緇素後生善処而者三身萬德無邊無窮都而自界他界有縁

無縁親疎遠近平等普利仍勸縁之趣蓋以如斯

聖護院　道澄焉

○食堂（内にあり）　中尊釈迦如来（赤栴檀の像　毘首羯摩作）　天子代々の御位牌　什宝を納む

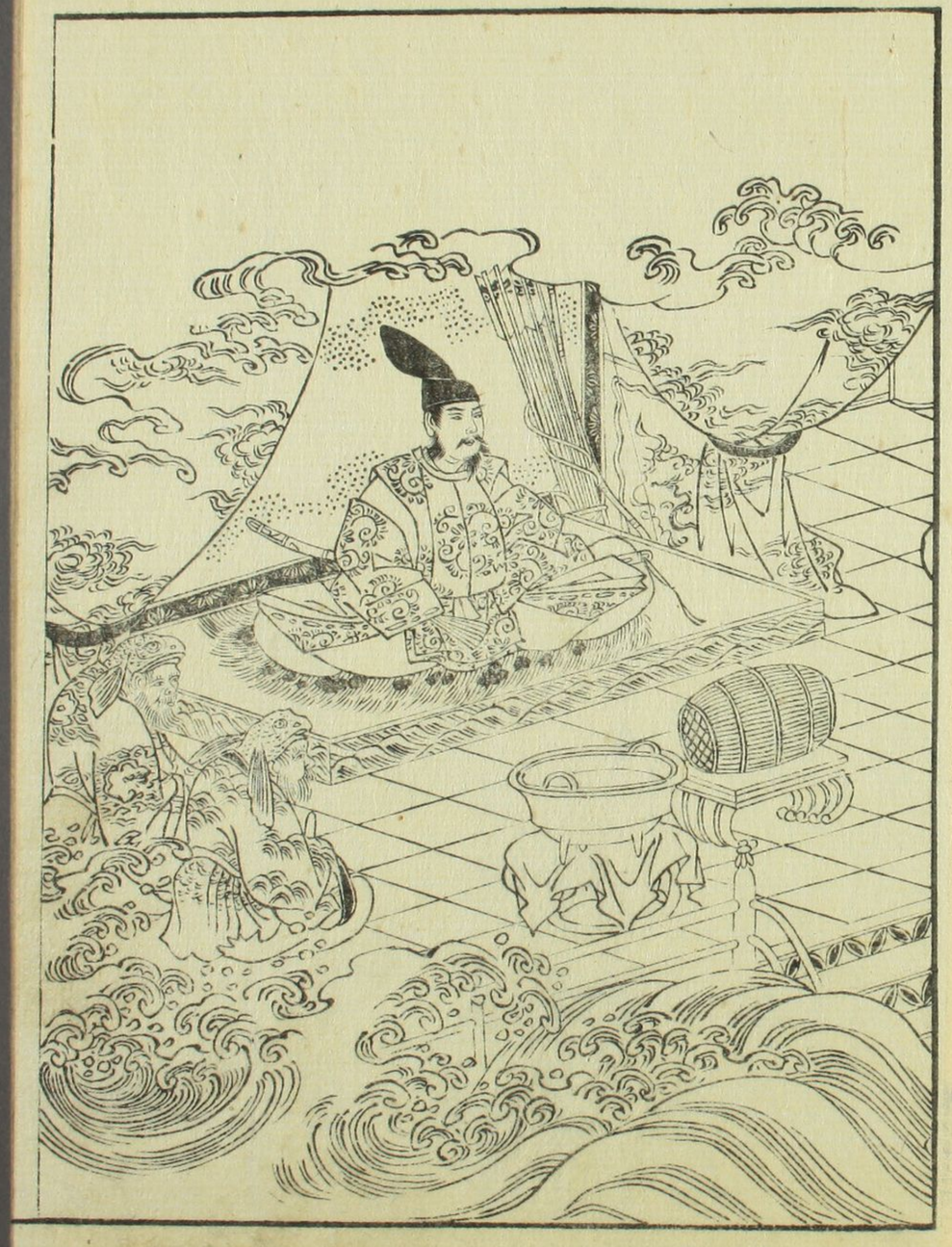
○僧の鐘（食堂の縁にあり）　うつ人六人縁の角管あり院の上へ通るなり

滅多くして撞ぶ事あるべし　其中に衆の字又師の字と数七字あり

其古物なりこれを世に希なる　其中に衆の字又師の字と数七字あり

又石端あり又る鐘に大門の道りしもあり　大寺よりみぐさ拾へ院に来る

俵藤太秀郷
獲十種寶
於龍宮
三井寺の尭禪
刎十種の其一也



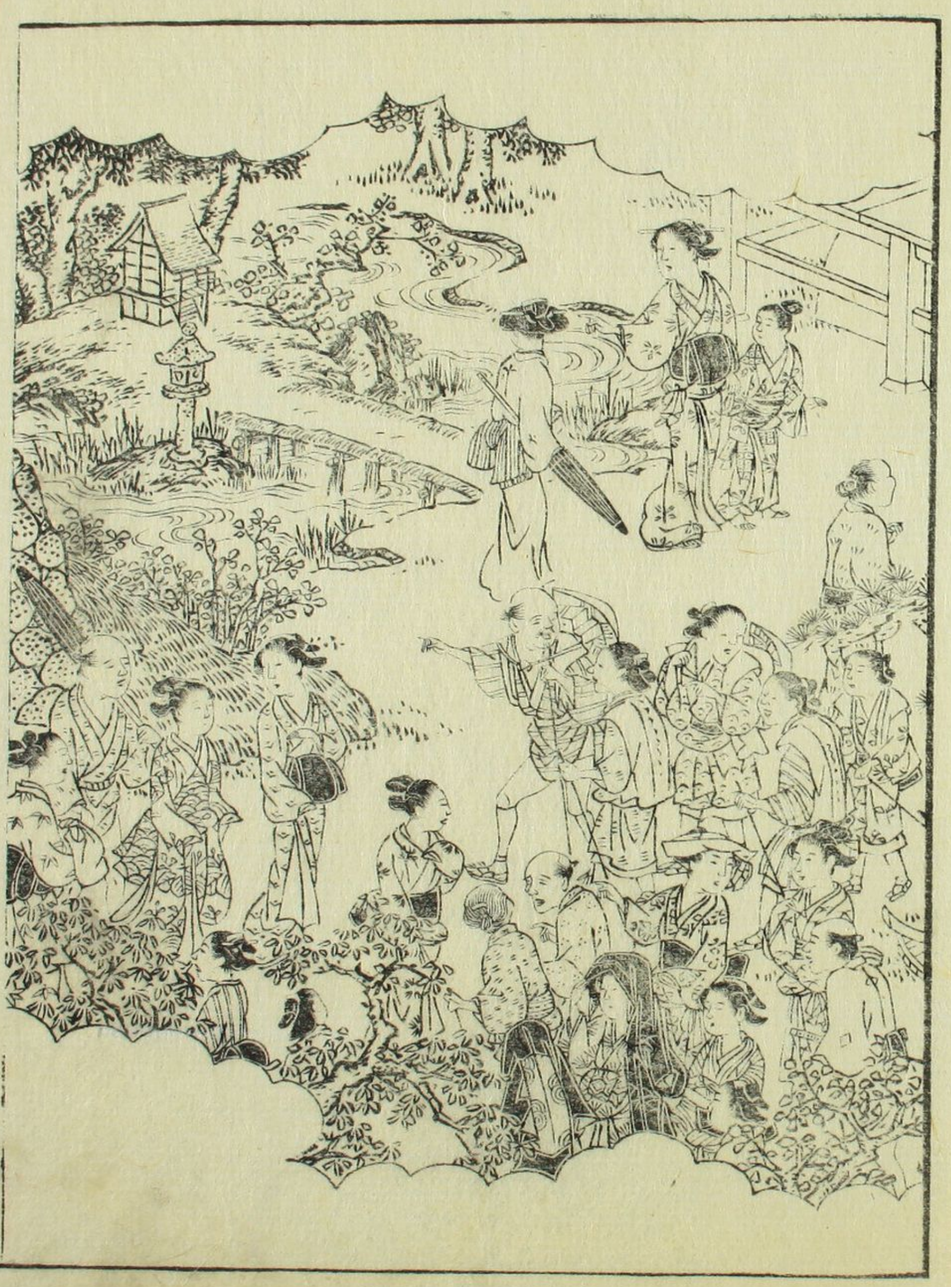
○護摩堂　本尊不動明王大日如来　○二王門　將軍家の御寄附なり
芭蕉　其角
○門外の大改石あり　三井寺の門さうぐやくの月
○經堂　一切經を武田軍御寄附　一説に唐かの大江怒元寄附なりとも云　○筒井東明座敷
二王門の前無門の内外をつゝみ其内の森の中に水ながれあり其石垣筒井谷とゝなへ
○敷蔓陀羅　二王門の内石垣これなり
女人三井詣　七月十五日　深夜の后より初まりうゝふい佛に二王門ゝうへ入れまをれまんざ
ゝらのうゝを踏しむるあるゝとて其石を去ゝ
○如意輪観音　南院正法寺にあり　西國十二番の札所　六月十七日此札焼あり　梅檀木の
像長八尺二寸　智證大師の作　唐より渡す　厨像
堂古へは岩間の瀧のうゝにうゝありて攀ぢのぼる　昔の遺跡
せゝり山上望湖臺あり湖上の一景吟哦遊戯の境　一説に云此観音元は如意ヶ嶽
義晴御所を東坂本宮太郎構へ　如意ヶ嶽
の小山に天神社に親音堂あり　元を奥の院とゝ行基の奥院の東洋
古俗の曰これいまゝ護法の末寺にて東本願寺
にゝをつの区ゝ石にひさゝれ拙しとぞ
○三院は　實相院北院　聖護院中院　園滿院南院　長吏の御住も親王方ゝ山門にて座主

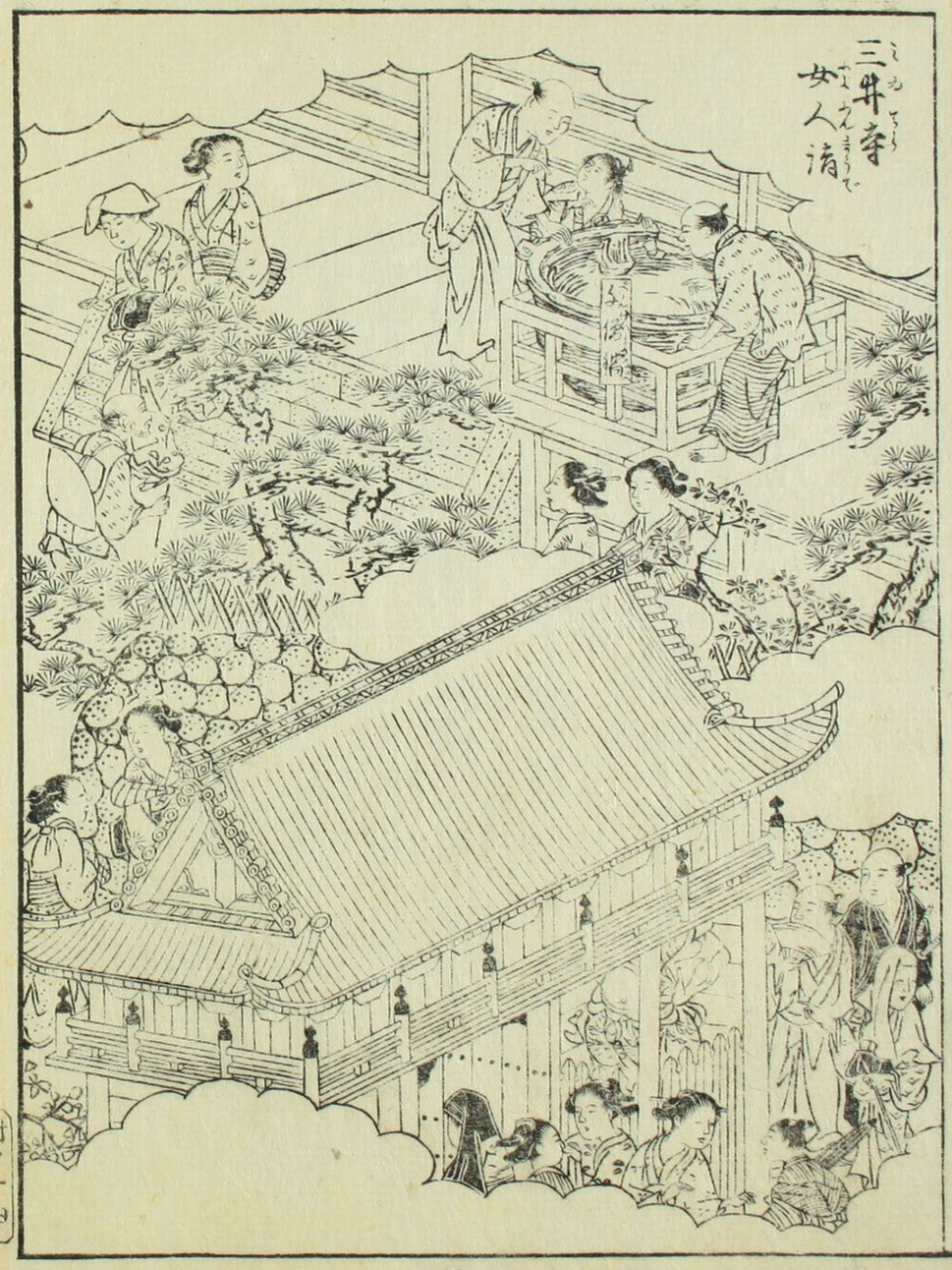
附ノ十二

ゝゝひ寺門にて
る長まゝゝ　實相院園滿院ゝれを公方門跡ゝ云
○三役者は　王林院、光林坊、最楽坊　○公文石は　右京、民部、式部、
○五別所は　尾蕊寺　近松寺、徽妙寺、常在寺　坂本、水観寺
○尾蕊寺は　正法寺の南にあり　教待の開基本尊十一面観音今のなる天満天神の
作なり　昔は志賀寺にみて別号笠脱観音ゝ　○一説三面佛　弘法大師
面長は大黒　○尾蕊は　尾蕊寺近松寺の間にあり　毘沙門
西蓮坊阿闍梨快誉の遷座ゝる　寺の間にあり　往守神軍陸奥守北義の勅請なり
○慶祚大阿闍梨之墓　九十間に方斗の石垣の内に石窟あり　康和歳の香れを
○元亨釈書云一條院の御時正暦年中に門寺門座主の爭ひあり　其時慈
祚門徒を引具し岩倉大雲寺に籠と　雖て後又園城寺尾蕊龍雲坊に移り
園城に慈祚あれば学に若に方より集る　故三井の鳴基　其時より盛んに記る
をゝり門ゝ三井灌頂の中興ゝゝ　後永暦二年後白河法皇慈祚が像を
恭礼ありしとぞ
○源八社　尾蕊寺の坂の下にあり　寺俗ゝれと若宮八幡と稱を俗僧に大津の宮
源八ゝゝ馬別当ゝり　賛うて日役の歴ゝを　後ゝ日罪の刑に処ゝ

山門の衆徒三井寺の
僧を奪ひ返し寺谷
中へ擲げ落す

附ノ十三




三井寺
女人清

其異魂あらはれ主人を害せんとせしに
の社と称し八將の經基滿仲敦光敦綱義家義光等祈願の時蒼鷹の群
祭の建しものハ此社なりゝ元慶年中の創建の由なり

○徽妙寺 教待の開基にて中興慶祐大なる十一面観音○薬師堂の志
堂寺の本尊○観音堂 如来の開基 ○明王堂 石不動 知恵院 ○坊舎 坊今八坊
○近松寺 る観音 開基教待中興安然和尚 大師の作 ○如来堂 本尊の開基 檀金三
如来と同佛と云ふ 寺の佛と云ふ 寺の佛と云ふ 老寺
仏ふ帝 ようなり ○千躰佛 長安元年毎年三月惠心院源信結此会の事り仏三万体拝して
蓮如上人 縫の名号 自一寸八分の像佛と云ふ
毎年七月廿日拝と称す
獨鈷水 ふ中水多く出る安然獨鈷を以て岩を穿ちて出る故なり 今楊枝水と号するもの是也
種樓 銘あり年号真享元年 種ハ
彩画あり 銘ハ後人補写 ○菩提樹 恵心の植る所

○安然和尚の石塔 近松寺の安然和尚及星然の人にて他教大師の系族也叡山の学
つゝく 密の教を悟覚し又元山僧正に従て胎義法とうけ蓮く 経論
と構窮 中比元亨寺と称して阿闍梨なる智徳和尚の法嗣と云ふ
近松寺 揚をとゞむ

○さて此安然の墓ハ三井山内の俊秀なり雲霞腰を回る湖上ゆゑに方
遠近の山野郷里顧望列らざる所なし 郷の強客去日秋月なり

客より拾宴といの近松門前の戯作の此の外あるを他日賢人
作ふ流切の河に関する観音御供にて去ぬく人でも見せまゝ
うてつかうの能中湖水ハ日本第一の名勝にて其ハ素写ともも筆の及
ぶ所にあらず 元亨寺 ぶおくり 図て図るに不も其ハ方ぶ一ツ
又る不湖のうゝ 城のうゝ 帝名 名物神社佛閣又ハ舊都古城に対て公卿
武家又名人等の概を考るどい若ぐ三の苦の上より並ミ居く名所と物語り
源氏若紫の巻鞍馬山の有様よりふ

▲湖水 あふことハ元湖海なりしを天智帝大宮より見ハなりとて近江の文
字を作り堂をさゝ沼遠江と号を成ふ遠江ハ湖遠山
つふ山谷の瀝滴不八百八河といふ 谷の流末大なるハ十ケ所ばかり
成なり○塩なるゝ海ともいふ海ともいふ海とも云ふにいふてるやあふミのうゝ
とよやう○唐の海とふいつなるゝ未詳うゝ雑波の拉河を
てるとふ山ハ〜ゝ〜べ〜 ゝ〜てる 能ひてるとの義なれ
ゝ〜照るの義にもあるゝ又唐ゝ海ゝ 俗りのるれば名付ふん
俗ゝカイツブリゝ云 琵琶の海と海の形似るを以て号けゝ元勢田ふ
海湖まで南北二十里東西の廣き所九里今津と他和山の間を廣〜小い

濱村西の海津中の大浦東の塩津と小い山を隔て就花に藤る堂田より小十七里ある東西廣く琵琶の後ゝ仰ぐ堂田より勝田まで二里の東西狹くして
北里斗琵琶の廉前のごとく勝田より宇治まで海老尾ゝ北し
竹生島紙霞ゝに里と人ゝうり狹く浪と日本紀神功紀ゝ浪と斗
いくあゝこのゝとゝたサ、ゝ小の志にく淺水の貌なり万葉ゝ石之る近
江の國樂波の大津の宮ゝもよめり○三津の浦ゝ志賀の浦ゝこれも
元ゝ湖津ゝ大津なり
○傳日巻靈記年江及の地折て湖水始く湛竭及富士山忽出平景紀十
年湖中竹生島涌出云　或云此説信ゝ

万葉集
あゝ九海ゝ浪ちゝりゝぶなけいゝもゝのゝ
合三
さゝ波の志賀さゝれなこちゝくいつゝ若い神ゝ
夫木
ゝ海の海やちゝひく氷る杖の月こゝくなゝこゝ紙ゝ紙　定家

東人

○湖中嶼

竹生島の神仙記に云ゝ高サ水上より又十九間其四ゝ十又所二十三間也
薩壮檀希戈天女昔慈覺の室ゝ淫し天女の三像ゝ長七寸三分左右の二神い
阿叶の字賀神弘法大師の作

○竹生島

○観音堂　記傳ゝゝの像長二尺三寸三像紀基の作示現上人建立して　西國

三十三所の札所ゝ○祖堂紀基菩薩の像其外宝物多ゝ毎年六月十又日
湖の蓮華ゝ人ゝ多ゝ○竹生島東の方ゝ湖ゝゝ三里ゝ即竹生島の民
ゝ人ゝ名臘師松村ゝと住ゝ元ゝ島ゝ社の正面ゝ海ゝ
雖ゝ人ゝ○又燒ゝ小島ゝ人ゝ馬ゝ湖ゝ島ゝ人ゝ

附
盛衰記義仲北陸の両軍対べ

三月三日島ゝ人ゝ竹生島ゝ人ゝ湖路塩津
奥浜の辺まで追捕してぞ通り
弦管弦の音ゝ長ゝ弦ゝ人ゝ
湖中波間の小島い竹生島ゝ人ゝ
三ゝ人ゝ彩と並べる浮坊漢涌の変幽ゝ海浸ゝ上て出下ゝ又下せば底も
ゝ武経ゝ南隔浮花の中ゝ湖海ゝ其中ゝ金輪際ゝ出る
水晶論のゝ人ゝ天女住ゝ人ゝ即此島の御ゝ人ゝ天女即弁才天
住ゝ湖巌の女身をゝ人ゝ
ら祈祈云ゝ暁ゝ出る月湖水の波ゝ漂ひ社擅の物ゝ
浪の音をゝ松ゝ風も合ゝて心の清ゝ
ゝ乞ひゝ玄石ゝの桜曲を弾給ゝ神も感應のあまりゝや神のゝ人ゝ
白龍現ゝ人ゝ
ゝゝ琵琶を開て
ゝゝ起ゝ人ゝ出給ゝ湖や此

高観音近松寺
尾義寺
尾義寺
八まん
稲荷
鬼子母神
弁天

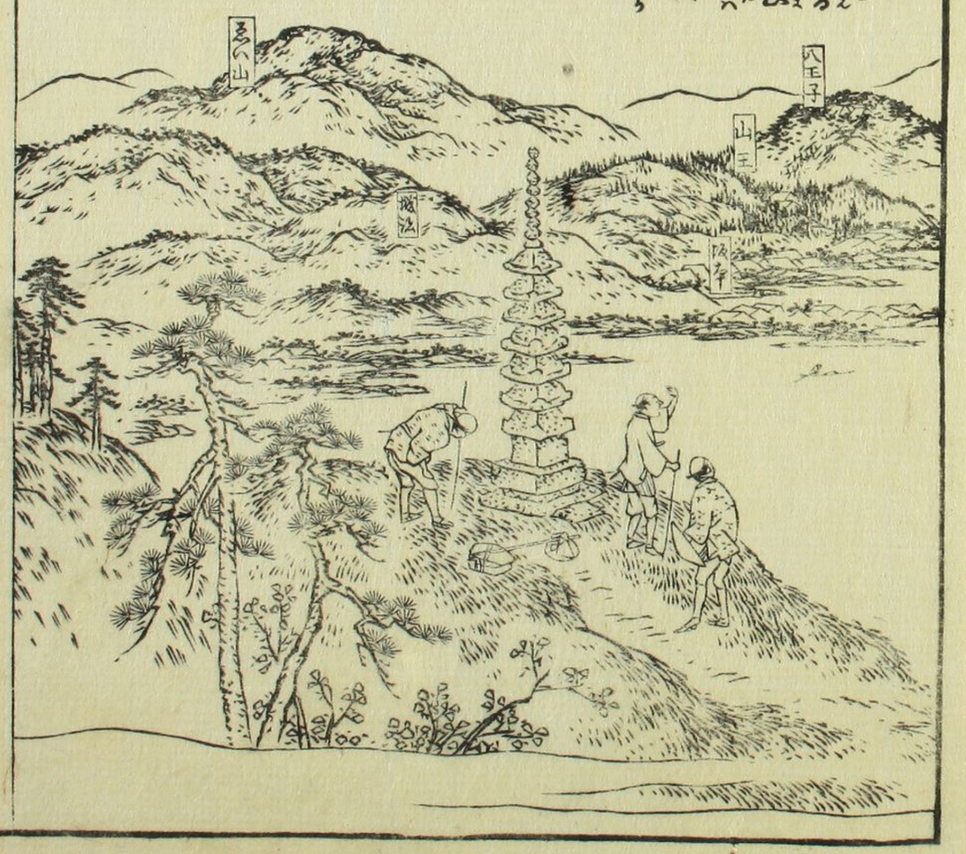
近松寺
弁天
弁天
金松神社

近松寺山頂安徳塔

湖上遠望の美景

足柄ろと林藤の大津の里めぐりて谷出て
ゑぞうり之岬里の一園を藤の留芝
をのべさえ見ゆるうくに相模ゑを
前にたゑりて脇和石場とりて
左の留芝の岬とし尾尖い御殿
の立石にのぞく尾花川を右の
留芝とでり左ゑ前松めぐせば
日右比良の名根を始として
芝田若宮浦唐浦の浦浦
ゑどは天の橋立松島も
なりべるがおとり海いひとゑ
遠と恋さるごとく甚よりたのま
約束をしてちりかゑよりや
と用るのやちりちるく足
ゆるぶくい海の浪りに
頃代りうとゝえ

まうが神の橋ゑ寺塔ゑ命も
九ゑ心橋の橋弁ゑ能のゑい朝ゑ
ゑつてうくゑ遠ゑ橋ゑ三上ゑ金ゑ
浜塚山金勝ゑ生ゑ白ひうり田賀山い
田上伝系右に顔ゑ和ーて其
中和ゑとびーくゑ見ゑゑ見ゑゑ
もーもあゑ武蔵い者ゑゑ
藤ゑ物ゑい出ーられ出
かく孔竹生ゑ竹ぐい
ゑーてちいさく浪間ゑ
浮ひうれゑもゑ
ゑれば見ゑひゑ
ゑゑ風とれい
其百の一ゑくや
ゑーん



後又万余騎籠りうる火燈の城を攻て軍利を得しも全くは神の守護
なりとぞ

○柳山仏堂の毘盧遮那佛は行基菩薩の造り給ふ所なり昔興福寺僧都の弟子に松室の仲算と云て学生あり
堅く浄戒を持て或時一人の児童あり日宿を乞ひて法華経を読誦す仲算
弟子に密額を与へしに仲算愛念して絶ることなし三ヶ年を経て八月
十又夜の暁に童子紙方を捧げ仲算に授食を乞ふ仲算是を与へ
永むあり法会のあり吉野の奥に入るが此山石巌そびえ時ならぬ児
童の竟よりなりぬ仲算ひたすらに礼拝し合掌して手を授けば樵夫答て曰
さしが去年此奥に経塚の音あるを尋ねたどりしに岩の上に松あり此下に児童
ありて奇形妙なる粧ひあり人数に多くしかるに其形を変へり
仲算大に驚び擬花のあるを付て其面に摩るがまことに故紙経巻の
竟といひ又へうり仲算これに抑ひ三宝に祈誓し永く離と守る魔と
なるとも此児とゝんどいひ又へ汝と天にあふぎて歎きさるがかの児忽然と
消し師坊が有縁の恩を謝して遠く又別れを惜み再びうりこそ日我毎
年暮春十八日又百の羅仙と江及行基菩薩集りて三箇日殊宴會を
今年は毘盧の後の尚もう葉い禅房其い毘盧をうり給へと云給りて又
仲算其奨を遂へぬ三月十又日の夜掘の家に毘盧と並さ香をうりく結

ゐる波紋くして雲のり毘盧を変て紅くぞ登りゐる仲算これを遂て
行基菩薩なるかの十八日の源なる私を神の波に浸め眼と載ひて祷ぶを
守る又採雲ゐくして春天の日望弛笙弦奏くし蓬海波をぐうかくく
雲され青やむ及んで仲算が私の中へうの毘盧をゐげうくれば絶なる色
と行基菩薩なりてゐくくうりぬ是よりて此毘盧と仙童とい号けうり
○多景島 行基菩薩と見塔寺ゐる法華宗の寺あり縁起草山集又
又西臨又弱あり。二所に方ゐる水ゐり十間二尺
○沖の島 沖津島ともいふ神社あり人家に又十軒蒲生郡又属を琴の表と産とを
○水茎岡 八幡の牧ゐりを入いるあり牧の者此山に行りゐ又岡ゐりを
天雲あひ干潟吹くく水茎の岡のこゐとゐたうこゐを
古今集 大歌所
水ゐされ岡のやうくいけるあれと絶くの絶けの霧のうりえも
○磯山 ゐる波の内に岩根又属をむくいの塚ゐるの塚のうりゐ
中又川あり川ゐりて菊菜を産とを ○松原浦 岩根の塚のうりゐ
○長命寺山 入口又接あり 浦合とゐるゐ 西國三十一番の札所 正観音武内大臣の建立比丘尼石方を
旅行ゐ又法和ゐるゐ。浄瑠璃ゐるゐ 寺中法式ゐ 寺墓を禁ゐと
新田八丁。えくちがんゐ共又行浦の内ゐあり
○八幡宮 水ハゐの樹を切られしを八幡の祠ゐ ○是津の八幡 其中又ゐ多く集る所ゐ
白石 松本ゐ二里沖へに石待ゐ水源ゐ六七ゐ出て名
ゐ白くゐの養ゐて白くゐ樹ゐ摘ゐ 所 支那 蓮の名産 所 おいがしま

ろう詠もと云一ゝ 名寄 志賀の浦まさる神やいまくもん波もとりぬまうまへの浦　紫式部
まかつの浦もおもふ
まるより起るまで一里半湊治なる岸の甘く御上洛の際りるにくく広し今は御崖ある
しておかつの浦にあり

○船 津々浦々凡百三十湊より出る船は大丸子小丸子小早艜等を総し
大津堅田は漁舟多し丸舟艪船とも其数千三百四十八艘○艜二千又百九十一艘
総じ此舟は耕作の助となりて肥付馬に准して舟の数とし　右は貞享三年の改也として淡海志にみる所なり

○魚 ・鯉勢田 ・小糸鮒堅田 ・紅葉鮒松本 ・丸鮒山田 ・源五郎鮒 佐々木の家臣に錦織源五郎といふ人わり
氏乃ひとあり鮒を佐献上の例とを依て湖水の網にてゆるさる魚へは源五郎鮒といふ ・蜆勢田 ・鰻勢田名根京橋 ・魦和介 ・氷魚田上 ・小鮎松原本浜 ・
鱒川 ・江鮒佐川 ・鮎 ・鰣 ・鱵 ・鮭 ・鯰 王城又十里をさらどしふり ・石斑魚 ・鮎 ・氷鮭 る
・鼈 ・山水鮭 ・ぎゝ ・鯉川 ・蟹 ・泥亀 ・石亀 ・鯏 ・河鹿 ・馬刀 漁人の云湖水の魚は日陽に對して
いづれ魚は西浦にあり氏御所
東は居る夜る源にあへり

○魚器 ・大網 ・巻網 ・擌網 ・跳網 ・唐網 ・魚簗 ・魚簀 ・カりく
竹筒 ・やとゝ ・網代田上

○俚言 ・ゑをを 日和凡くらふ ・まやて 雨と風とを ・勢田荒 ・伊吹凡 ・やませ ・なげ

せ凡 ・さき凡 名あり ・日なかし 秋冬の名あり ・ひかし 中にも比良おろしひらとろし先斗人の物かるところなり梅くる時のことなり
又云あるは伊勢東風吹によりて船東浦をのり多くは又あ凡吹ば西浦とのり
て凡敷さく又云暁より日の出まで勢田嵐定めて吹通をこれは勢田龍神まい夜
竹生嶋へ参る刻かくいふとうふ ○二月廿四日は比良の八講湖中に船を出さず
凡神怒りて之故は凡の定まるぬを論義とふ
○勢田にハ正月大福茶をたてゝ喫すりまりよりとりひく飲む○矢橋ハ早ゝ
粥を食ふて今日もかい日和なとといふふなり
○凡土 湖辺の土は灰汁なくして水に泥なし故に桑を養ふに清くして
又茶にもよく合へり実えれて人性も正直にしく青麦清潤とよくかでり
然じて江州八十万石皆此水よやしなはれて年々の貢絶えを大骨會乃
稲穂を此国よりも生れ例なり

○産物 ・大根 山中 志賀郡につき ・蕪 兵主 一抱引ぬきし ・五茎 二種あり又其根太きに完ハ妙なるにひとし ・郁子 奥嶋 とふもの妙
年十月朔日 ・苣蔓 八幡 ・ゆもち大根 ・茄子 ・瓜 平田 清名 ・獨活 ・山葵 ・揚梅 ・
梅漬 竹生 ・茶 松尾寺山 政所 ・麦 尾花川 ・松茸 勢田山 石山 叡山 大谷山 大津山 三上 佐和山 小谷山 ・黒皮茸 三井寺 ・
薬種 ・石灰 伊吹山 ・竹 長命寺山より出るは山王の殺竹之又竹生嶋の舟の棹又用る又安土 ・覆盆子 ・桐 海津 ・もくも 堅中より出る
ちつ一への栗の大樹の根なりしん ・蘆荻 奥嶋 ・絹 ・縮緬 ・糸綿 ・つり柿 長浜 ・布 高宮 ・晒布 野洲 ・蕪蔓

絃の竹笙啓諭

松室仲算
慕仙堂

儒俤・佐〻木氏の具豆廣之甚子孫・扇背・数帳・硯・えせ・弁・墨武・石白部・
材木・屋本・屋石・切石・屋松戸・盆山敷砂・大川之方解石芝より出ル・岩木・椀日・陶器・
綿・美浦・波文・根・天狗石尾山・餅醒井丹青之合・もろもろ餅・松ふる・蝋
燭・鍋俤・村・柳園ふ・小刀柄・きせる・絵・川・池の・秋寺山・恐人甲賀・秋炮・
八合弁武佐刑部之軍中兵粮の助しとし・馬津・石垣築阿部の人と名人として今も法候ふ名用らる家之・やき餅川
菱餅堅田・珊瑚三井寺・袖解餅志賀・菩提樹数珠・青瓜・柴敷松葉勢田
鬱上塗玉鹿・柳原板・むろす棹木・綾巻・横槌芦ふ・葛川・津木・砥石掘生山
炭材本・青花紙山田・水晶田上岡本・三尼下草真松田上・鞍津・玉茶・揚梅金勝寺・
きせる・矢根・籠・履・菖蒲笠芦ふ・いけづき馬伊香郡・温飽日野・茶・
炭・鄭・納豆・園座八幡・石臼・切石・餅米・納豆藤・薬
本・スイノ・板子・獨活・蕨浦・鈴虫尾の・松虫平田山
○洲崎　○西浦・柳ヶ浦・唐浦・苗麻浦・堅田出浦・小松原・
うちの浦・船本浦・大浦・たぐら浦・ちうが浦・木濱・木濱ふ八本の茅の浦ふ八る墨之叶濱さき
琵琶川の末ふ〻洲浦多〻　琵村・安治・須原・堀・吉川・小濱・木津川・分津

ふ風八神よりぬく社ぐ波ふ本の茅の浦の名紙ちうちうん
○東浦・まきの浦・うゝと田浦・九田ヶ浦・志那浦・ふ田ヶ浦・
荒神山の唐ヶ浦

○瀧　○比良滝　滝滝滝ふも云上北ゐ下六十ゐ以上八十間ゐく橋八ゐ江見貪一の滝ちり　○葛川明王堂瀧
高四十間中ゐの法ゐより水落弁ゐ
相應和尚此滝の下ふ不動を彫ゐて
○かやまの滝　墨智川の川上ふあり
如意が岳より三井　又墨智川の川上ふあり
西門のたきしゐふ　○山上不動坂の瀧　○音無瀧比叡ふの西坂あり　○樓門瀧
滝高さ八間　○霧降瀧比叡山三ノ岩
○山　○長等寺ふ　○比叡ふ
間山　○伊吹ふ　六月中旬　○石山　○瓜澤大日山　○篠生嵩　○飯尊寺山　○石部
金勝寺ふ　○日金山　○田上不動山　○三上山　○横ふ　○鏡山　○多羅尾山　○岩
根山　○綿面山　○瓶王山　○布引山　○繖ふ　○荒神山　○八幡山　○安ふ　○甲幸
山　○佐和ふ　○把路山　○多賀ふ　○腸ふ　○池寺ふ　○南霊山　○岩倉山　○ふうたさ
ふ　○俤月　○白山寺山　○ひくまふ　○墨宿ふ　○常のふ　○硯山　○志尾ふ　○招井山　○
雄谷山　○動生　○已高ふ　○志澤山嵩　○八相嵩　○ふ本山　○菅山寺ふ　○水尾

山○滋賀郡山○守山

○近江八景

堀水の絶景をあつむ比良堅田より三井寺を見つくしたり　明應九年八月十三日近江政知公岡通之又る佐々本高頼の招請によりて石見より掩岡あり　栗津年筱勢田夕照をあつめ八景の詩歌序文など作りて八景の影写此時より始る詩歌序文は書之の永禄文亨

○神社佛閣

○白髮明神　○破磯明神　日本武尊御廟なり　○多賀　大上郡之祭神伊弉諾尊一座也

日の若宮とも撞社記　六月十七日神事舞あり　○日吉山王　○筑摩明神　猪名川祭　毎年二月初日あり此神の御ちかいそ女の男と成る故に女ていのれば男ひとのまちかり祭今いあり

足ることとてもまれにあり　○建部　勢田の一の宮也　○鞍嵩八幡　矢橋　○水尾　猿田彦細女　○牛頭　村下笠　○大宝　村　○小津

○兵主社　又月十八日本社十八郷大祭　○伊吹社　日本武の命　○苗秦社　天智帝七年之造る　○三上社　○井口明神　○大上社　ここの名は猟師三郎が夫なり　○大上社　ここの名は猟師　○岩清水八幡　二月中山十三郷大祭　○佐々木宮八幡　○伊香郡大音明神　種の名は縁起あり　○粟見天神　長浜の隣里十郷の氏神　○油尖明神　伊香郡之弓矢を出る神なり　縁起あり　○鞭天　大河之森　縁起あり　○新羅大明神　三井寺　○日宮　大津　○八幡宮　今津　○豊満神　慶年　○宇賀神　佐野之右九長浜の産神　○天神　光根山　嶽津光根命　金徳の建金毘羅　○流天神　天津光根命　本徳神社　松原　石白鴉　弧山　黄金　日本金山の始りとなり　○三井寺　○西教寺　坂本　天台宗寺

浄土の一本寺　○浮御堂　琵琶湖志心傍都　○三井寺　岩間寺　石山　長命寺　竹生島　芦浦　西国巡礼の札所　○不動　猪鹿掉尾の術あり　○矢取地蔵　倉　○本年地蔵　○石塔寺　天竺阿育王の塔あり　見八万四千の塔の内日本三つの其一つ毎年大雨来て此塔をゆる今窟寺　○平流山　紀基記十九院　都率の内院を移る　○三国伝記曰　菩提寺　石山の一峯　盗賊来て湖水の渡り下を其下り　隔て石を化して山の所つくり　今の荒神山の跡石也　○高野　永源寺　寂室流の一本寺　○番場辻堂　一向宗の源　○池寺　元三大師自作の像　○百済寺　下寺の名　○正樂寺　佐々本道巻が善提石　○松満寺　松尾寺　古き寺　○瓦屋寺　古き天王寺の瓦を作せて其所と定　○清涼寺　○龍潭寺　○菅山寺　芳泉寺　○安土山　総見寺　信長の城跡　廣間の観音寺　佐々木の城跡　観音寺　○綿織寺　野須之本観音寺　上人第五室開基　○武佐寺　長光寺　○長尾寺　佐々木二里右名　○野寺　○土山寺　○雑賀寺　○浄信寺　地蔵　小脇治の右方流井の祀　弘法大師の縁起あり　○建立の寺　○石塔寺　阿弥陀寺　金剛寺　観音寺　繖寺　味土寺　勝華寺　日向寺　般若寺　長浜御堂　平田明照寺　等　○観音城　繖山の人佐々木六角家の城跡　○箕作城　建部　○和田山城　伊勢の東　○鯰江城

○古城

瓦智川より二里上南にあり ○岡山城 後 ○八幡城 今の宮ら之関白秀次公御在城 ○永原城 永原
観音城没落の後此城に籠る すたれして廃を今八幡城らの跡 観音城より城主
城主なる重虎 ○日野牧音羽城 蒲生代々の城 ○日野中野 蒲生氏郷 秀城主 ○佐和山城
佐名弥四郎 細川法師藤 ○信長公の時佐々
を築り目加田修理亮 後小川佐渡守 後上坂治部 ○佐和山城 石田治部少輔三成 破却 ○信長 君服官内
本後ハ石田又左ら来原平馬 ○古図の時城主久吉郎 ○磯山城 破却丹波守城
後石田治部 三成知行十二万石とも又十八万石ともいへり て小のあり家は磯山丹波守城
主より磯山の城主ハ松原弥右衛門より佐々木の末流成れの重実 ○松原城 松原右衛門居之并
出城の城主ハ松原弥兵左衛門より今家臣ミる百姓となれ 尾は城きより今
松原左衛門 ○高宮城 高宮三 ○福島城 彦根の ○久徳城 多賀の奥ニあり ○唐ヶ
居所是之とらふ 河内に住 を辺之 久徳左近住
崎城 明神山ニ在レケ 修築ある話 ○荒神山 実れの ○山崎山城 荒神山ニつゞく ○安土山城 八郎左衛門後ヨ
織田信長公此城築天守の始りと光秀亡びて後秀吉公三法師を安土ふてらうせ長谷川丹波守ぶ
田玄以調 ○水口城 長束大 ○佐尾城 箕浦 要害の地金銀の鋳 ○今浜城 今長浜といふ城
蔵之公 蔵介住 君下ニ出で温泉の説あり 主治部少輔
舜浅井長政是を築けれ ○上坂城 城主兵庫頭浅井 ○小谷城 浅井備前守亮政築之此山の東に
秀吉公城の始め是之 亮政これを云 大きなる池の奥とらふ城あるハ浅井
通るとらふ小勢ふてくハ ○菅山寺城 本丹の小ミみる佐渡 ○勢田城 川東ふ山岡美作 ○大津城
ちうかひ城なり 判官入道道誉住む 入道阿弥住
神ちハ大津奉行傳九郎 初長後ハ浅井主膳正次浅井居りても其先東坂本ヨ明智日向守城主
より明智左馬介坂本の城ヨ掛ひて自殺甚ハ後大津へ引て京極をふしる次城主より慶長六年
よ膳所へ ○坂本城 信長公山門退治して坂本の湊ヨ城を築日向守に預けしてれをゆうし其
引ふり 日吉へ寺ふろ今津の堂とらふ者の城ななりて又云並木の松の湊にて
かざるふあるところなり並木 ○雄琴城 城主和田民部 ○木野城 城主木野十左衛門 ○堅田城 城主堅田民部 ○小松
の松ハ日向守が植るとらへり

城主小松内膳 ○坪笠山城 坂本に在り ○青山城 坂本に在り村住中守 ○木戸城 城主木戸越前守 ○比良城 城主田中左衛門
長田城 大溝かわ ○横山城 ○田中城 大溝より一里北之田中兵部住 今井伊勢守路行つぐ ○打平山城 ○村上城 手岩
海津之和 ○東万木城 ○高島佐見城 城主法泉坊 ○山本山城 神崎甲三河守住 後浅井対馬守 ○新庄城 ○善
提寺城 去本三河守住

○陵墓

○光定塚 日上に ○小町塚 多平 ○定家卿塚 室飯 ○恵心墓 日上に ○慈恩塚 日上に
○虫改塚 彦根 伊野口弾正塚 番場地蔵に在り 伊勢守自殺の切後を ○日蓮塚 室飯 ○井伊
多賀の寿我 ○鉄塚 摂川 ○高宮三河守代々塚 西院 多宮に ○曽我兄弟墳
国三郎が寺之 寺鬼王 ○中川清秀墓 津の嵩ヨ国死 ○五社塚 摂川の下 ○弁
天塚 篠原の田の中ヨあり様を植る ○日像塚 今浜 ○日野中納言塚 柏原 ○番場蓮
華るに数百人自殺の塚 何れの年 此五百 ○宗盛塚 山守 ○此餘本文にあり

人物 佐々木秀義 子 ○定綱 ○経高 ○盛綱 佐々木三郎とふ 後戸の海を馬にて渡し
城後の塚を 攻め取る ○高綱 佐々木四郎七ヶ国を務む 先駆宇治川先陣 ○義清 定綱の子 ○廣綱 ○信綱 盛綱の子
○信實 ○秀義其先ハ宇多帝の皇子敦実親王より出て二世ろ

佐ゝ木道譽

ちく源の姓を給はり世々兵庫助成れい近江佐々木の荘を領し給ふ秀
義より又世の孫へ保元の乱に義朝に従ひ平治の乱に悪源太義平に属
し鎌田政家等と十六騎平重盛が百騎を破る義朝敗亡して及んで秀
義い近江に還り庄司が罪に困窮し押て郷つくして陸奥に赴く路没谷
庄司平重国が聟となり婚して一子義清を生む平を経る
源牧別伝を国に流され給ふ秀綱蟄居して安房に向ふ
秀綱義兵に応ずる及んで近江国甲賀郡に帰て大原の荘に住す平
国家継と戦ひ矢を中て斃れ給ふ秀綱を
衛護して覇者の功を達しむ五子の他い人の知る所なれば略之
○鎌倉源氏の御代に三十六人の国衆八十二人の郷侍あり多氏郷の外に一国毒
佐渡判官道譽 日吉神判官氏郷に属し此時に及て二つに別れて要害門
より南を江南佐々木六角と号ひ秀綱を小と江北佐々木京極と
ひく高氏を祭る氏い道誉の子ひく宗綱五世の孫ひ道誉
左衛門尉検非違使の任に補して道誉い京師京極に住し秀綱い六角に
還る故に子孫の氏として京極六角と称せ多く近江の守護たり
仁の比に高氏文竜の比に氏綱永正の比に定頼弘治の比に義賢に天
正に義弼に至て滅亡ひ

○佐々木高氏 佐渡判官ひ小条に為の射と芸に刑祭して道誉と云ふの射
後醍醐帝を法花国に還し奉る時が淫樋日くして
紀遣を見て霸に利尊氏を奨て遂に弟ひ一族根の軍に赤松
と戦ひ行の下に官軍と破る正平三年 高師直に後ひて楠正行と京畿に
攻る正行戦死を其い後義詮に後ひ京師を去りて官軍と矛に敵陣
八幡山の険難に進む志義と蒿戦して大に破る其い後に義詮に後ひ京師を
守る多七年此年後軍功多く二心と不情して義詮遂に征夷将軍に辞せり
る佐々木道誉其功に驕て驕者日くに多くの武人の国郡を奪ふ
に及ひ射に乗に如に命じて妙法院の相の枝と称し此狼藉に新て
宮院を焼き人民を悪く捕ふ親王跪跪みて僅に脱出ひ息秀
綱か〜に近よて撓を抜て道誉と矢んと山僧日吉の輿と振
て切に敷奏に為氏止ひを以ど上総国に流罪に此に抑ひ道誉に傍の
奏を懐り国を紛に乱ふ及んで多くの猿とひ其性を乱て兵に芸に衣裳と
うぐう三百人斗者に賞ひ多を挑ひ乃中止宿に為毎に妓婦と集く
飲楽に狐も恐ひ其性を乱て近江に還り四十三人の衆とともに
花の下の舞に優を示も錦繍に虎豹の皮に座に五尺に方の盤に香炉
を置り緒を〜て華に闘しめ金香衣裳に盛かぐるに力のたぐひをそろへ人

よ長ずるのおそれ媚妓を弦弟をそそのかし遂に博奕をして一度に数多貴を紛失し其の家毎日不焼の蝋燭の流滴を創らして門僧の俸禄を充てられし

とぞ聞こえし天文二年に居城を二年にて三年に城を築き高秀家紀氏代々を排ひ一衆を引くんで宗田の郷兵を初めらす

○

佐々木氏頼　泰綱が孫に達氏三年尊氏及び「源氏」の代十一歳にて親族たちの城を攻後亡年中に氏を出義と共に構へ源氏の西の侍を避て薩摩に崇永に改む此後軍功多くして番山より神輿を振く小門を犯し宮殿に乱入の時後光厳院氏の命にて拒ぐ難き困て数十人を殺を帝の書の襲来を待て延徳元年に年を義信に受て利義満の牙満高を書て受く近江の守護なり先を上席とす

○

浅井氏　系図の被官其先後光厳院嘉吉年中三條大納言公綱後改氏改勅勘と蒙く左遷せられて佐々木系図中勢州浦村に移る三條家の御紋を不なして江北浅井郡丁野村に移居を定て一人を生む此の三歳の時勅勘免され後に

て安積郡を其の孤にありて丁野村に成長して十に歳の時持清嘉の野に出る氏結て先を逐て白我い丁野村流人のるいあるも右仕るべく和ひそれば持清これを祝ぶ

こは却りて公郷のるなれば別に郎名氏名のつせ郎其の里と合力せらるる

浅井彦七郎重政後彦左衛門と名のる其の一人なり彦三郎忠政こゝに其の三人なり

嫡男彦治郎賢政二男彦十郎先三田村の家氏継ぐ三男彦八郎先大脇本の家を

とる嫡賢政三男あり一に彦二郎教政後赤尾後浦と名る其の二男亮政後浦名る先に六郷侍

なれども上坂の城今濱の城を築て強大の家となる亮政に男あり嫡男

彦二郎高政に二男彦九郎久政浅井下野守に三男宮内少輔に男に僧となる智山和尚とする

二男久政のるに彦九郎長政後統者先近代の武勇あり一に信長妹婿となり一に万福

丸とのるに後終に信長と戦ひ長政万福丸共に小谷の城に扶ひく自害せ

○

蒲生家　六角家の被官　先祖は後藤左衛門尉秀郷の三男に蒲生郎を称とこれを蒲生右郎と云ふ日野牧青羽に城を築き蒲生

後賢秀秀郷に至るまで一家相続冒に及ぶ後奥七代の孫蒲生秀郷より又七代の

末孫蒲生貞秀入道して知用法師と云ふ嫡男を蒲生秀行と云ふ

初軍義時に仕へ早世に其の後兵衛尉秀紀壮年にして自害を秀行の弟

左衛門太夫高郷の嫡男宗秀に同壮の総領式を云る其嫡蒲生後右郎賢秀神

ぬ佐々木義賢に属し後織田信長郷に仕へ賢秀の孫を代信長郷の婿に

て蒲生忠三郎氏郷と改めて中に伊勢松坂の城を築る後豊臣秀吉公に属し

て奥州会津百万石を給へ飛弾守氏郷と云秀吉公神に蒲生の女を娶まり

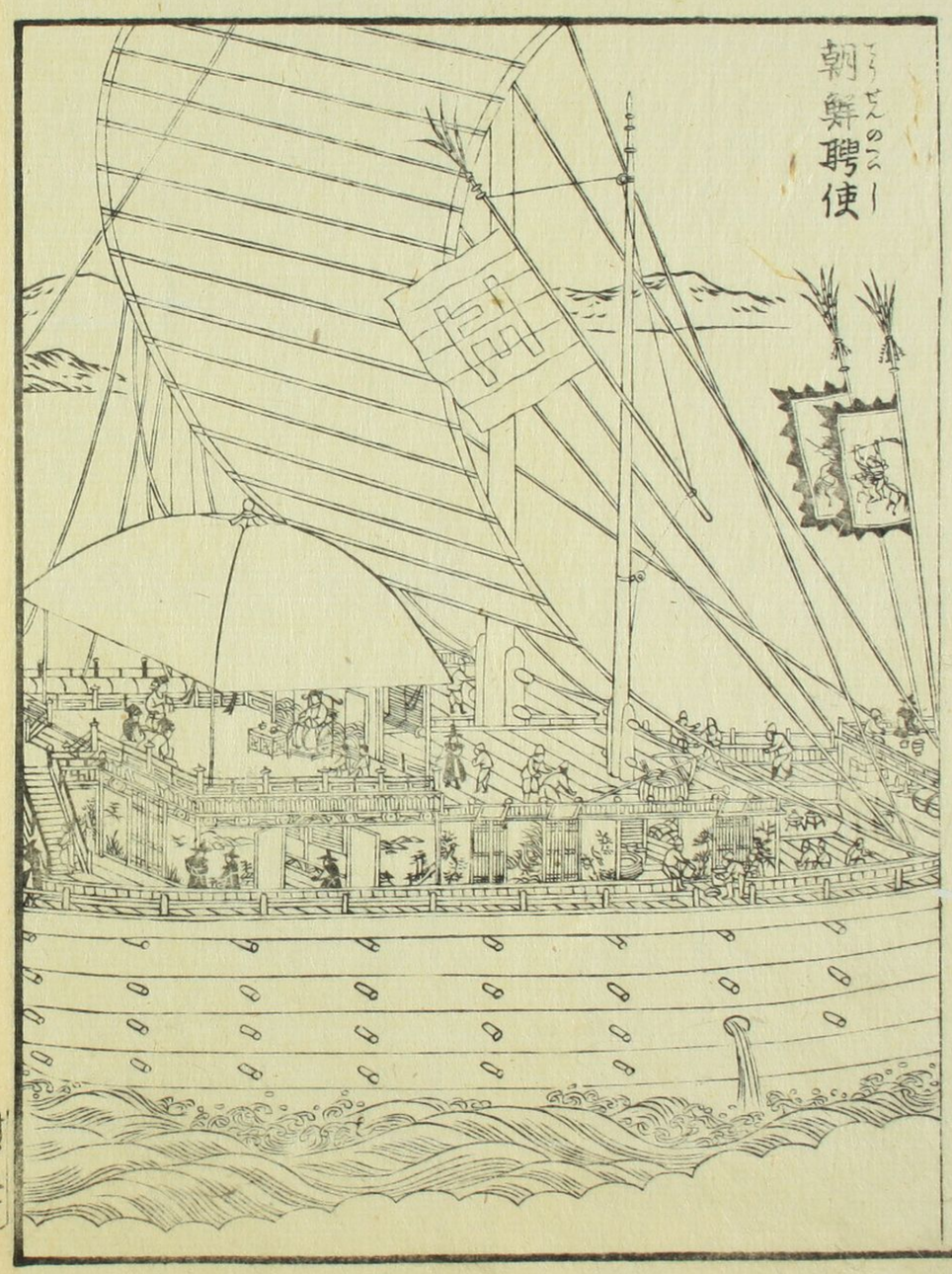
○

織田信長公　天正元年岐阜国安土城を築て住り神に乞る五重の天守を

石垣上の廣さ南北二十間と云ふ造營の美を盡せりと天正十年六月十日明智左馬介光秀を攻めし時近の諸侯きまの家臣あり後に寺となりて
摠見寺と云院を建て代々織田家の庶子をして今に至る○信長其先い平相國
清盛より二十一代の後元暦中平氏の一族悪くゑぶ守の重盛の二男資盛一名
を電妻に抱せ尚國津田の郷に居を資盛其時一首の哥を添へう
近江なる津田の入江のうらゝ見ぬ人に逢ふ海人の釣舟
後世名を上て後裔の流とをかくて妻い其に名書に侍りなくて絶に津田の
長の妻と成る家の紋章織田の莊の神を天下御祈禱の巻数と授る江見を
經て入京を本とす津田の長を宿とと因て彼資盛の子孫名乗りて書るとも
後津田擬吉美親真と改で織田の先祖元と代々織田の社の神職なり
後に紋章の守護武衛義孝彼神職の裔を以て六奉行の一人に迄る紋絡めも
名れば名れより尾張に移り再び武門の繁昌といふべし後に信長紋章國
を討て織田の神社を修造し又安土に城を築きその中人あり○信長を
織田彈正忠信秀と号し天文三年午五月九八日
誕生日十四年十三歳にて右濃の城を立て元服し三郎信長と称し十四歳
始めて三河吉良大濃の軍に後に十五歳にて城入り道三の女を娶
十六歳にて上総介と称し永禄十一年軍功の有を以て将軍義昭より感状を

桐引両の紋を賜ひて遂に尤大臣に至る天正十年六月二日日向守光秀に洛
陽本能寺に攻めて弑せらる時年四十九紫雲大德寺に葬る摠見院泰岩宗
謚を受あり男子十一人女子八人○小津田擬吉美と云所に居あり又八幡宮
と云社の所に居ありしもの信長公先祖の居地なりしか

○太閤秀吉公　信長の附江小の守護不とを小谷の城小勢にて守難しと
御元亥あり一人い若狭守高次一人い長濱と号し此節江見未詳故に家拙を
用江見の右城ども秀吉公の仰にて長濱に尚次一人い丹波や此後近江平均を受長二年十二
○其先い江見清丹郡山門の住居後遠信にて尾張國生駒智郡中村に住居く
國吉とも其子吉高侍といふ秀吉其子孫に成り其中村弥八と云
嫁にて男一女を生む一男い太和大納言秀乃長幼名小竹と云ふ一女い三好武
義吉二位法印一路の妻と成る○秀吉の童名を日吉丸と云ふ後遠江松
下加兵衛尉之綱に仕へ膳大に仕へ木下藤吉郎と云ふ後に武勇あり信長
に仕へ木下藤吉郎と云ふ後に武勇あり柴田勝家丹羽長秀ゴ苗字の一
字と云て羽柴姓を守と改り天正十年に人信長公の仇を討其功に因
て近江に海一郡を賜ひ羽柴大明神と崇め切腹に成賞と


朝鮮聘使

大國のおもゝ〳〵い仁德
天皇の都の御紙
ゑ〳〵三韓の王又
唐土の御門より
もゝそるけき浪花
をすけて我國又
入夏とゝい神功
皇后のむゝし
の御例し

登庸せられて関白太政大臣従一位にあがり豊臣朝臣の姓を賜り大坂に伏見
の桃山京師の聚楽と移り住ける玉の臺は方々に造らせ又御苑を開きて多
くの金銀を諸国の者へ配ち施をなど前代未聞のふるまひ慶長三年八月
十三日薨去時に年六十三正一位豊国大明神と崇敬を北の政所と称するは
かの糟糠の妻にて卑賤の時より伏従し給ひ高臺院に在りて貞操人に
勝れたり妾は浅井長政の女也

附言 長嘯子豊臣勝俊さく衣曰

上略 故関白殿はおさなくまうくる信長公に仕へまつり給へりし比明智乃
なにがしとかいふもの御かたちを給へりしを御ほね本なれるは給ひさせて
おひ下くまつりけり此度ものゝしくきこしめさいでやさるですかいうん
取まうしたるものをといひとなし。それにはれかのもののうちをてどと
まかひかせいとはやくのがれ出まして人とかくとこそあれ。都この軍とくに
やぶれあやかしろぼし我君のはたむくひあまりれたなひろしこ家
に追ひかけ給へりれぬらげて紫野にかくし参らせ御ちかふりの
ことさはしさらし。給ひものし給ふ其日よりなりたれば天下に名たゝる
かぎりは各御ともにはうまつれ御おくりしまゐらせまつりいかう
まぼろけの御裡にさくまる人さへなかりしまく。ほれ申すにすれぐ

とのゝはいとはれたる儀式あやかなことなれが法のうたくまいとものゝる
しらすてゝ後の御わざはもやうはいとなみたてうれしかりしはしくし
させ給へしもちそさて御寺いかめしうたくりこられ。御封あまたよせらる。
そうかんかんとふめり御そうみあらはれ給りんろいかもののよさくするひ
と申さしまさぬことにてよるうなげき申すを馬車さるかつらねは御門よ
はどひるもさるはへぬ年よ申りひゆるべし。かゝれがそのころ世にし
らしめさ漢の高祖元さるは叔をうふさみせし身ひよまづくはるし
大風おこるまゝたぐひぬ草木もなく。東ま名ざかよ悲しも止ゆまど。夜
昼をわかずものをえうびせられ長えし弱もとさ給ひとふとなき。に聞き
まえざるべし。おふされは関なくくちざしと恋る。独まき隼人の薩摩
深沖の小島壱岐の国対馬の海も波乃夢抑さまれ。こまくさう。
新羅しこされ王乳長足姫のむかしはみえり。我国にまゐりまうでぬ
ゆつさかしこまり給ふとすんずるし。もろこしは御門さこし免し
もどされずもし名つさきたる軍御後よりをわきれ浪路をまけ
はゝきまりまどふされ申さるる年の不れるびんなんかしとの給ひ
く中納言と申ゆる御婿の綾におれまうけしつ。申さしまま臣ま
仁徳のむかしの御なよたはくりかゞれ給へ我王は臺の口方にてうちさ

へくむかふ面もまづ申たれどなかなかさこ日してめしつまてばまゐりぬ。うち
をどらかまちかくめぐらしふたたてられさまじくのりのゝ喜びへべさ
らなりや。かゝめいられよろこびしもめづらしみ。こよろこびのりのなんならし
かど此大納言利家筑前の中納言秀家侍従宰相中将侍従など
をべ各ほまさ出かたまとゞまりもし門にいたるところもさうらく
ありかまへいで出でお出ましに帳をかさねえもいはぬ錦のたいさし
出で御志をまつりあれおをやかうする簾たかうまかり御らんなるべし。
こと国のもの対面たまはらせ給ふうちも不比等の御例とぞきこえし。
うちゐえいし出来まつるさま眞あり。御前の手をかけまつる事。座かう
ほくだてまつる次りの左右にかれをふまへばふもさらにうるれいぞ
出でつんでとし。夜ひかる玉此ほ箱なやみしきは出なれどこれは出し
あるまゐるあるほどやかに同も出よだに鴻臚の昔をおもひよりてこる
たぐふ出かせらはさふ我王々ふようるぐくせうど此国のものびまるし
あらしまんと移ふまうるはをはうなれ手あるなりとみてり。あるよ出
とらひつくりんもこはされまし。いさやか中うの手もいふし人の代く
よもありやなりやと。先難波のこやこりみるひてんかし。たかれやる
出雲みそびへ玉此様尾。めなかられ様。ふむなし出もそう出そ給しう。

瑠璃の瓦中くはさまし。夜のかゞやけば手なれの人毎星をはらむとは
やまされ。ぬるまでめぢとまく。千里もふかれ燈とのぞこ。昼のかゞやきみぎ
りふべくむなれるを出もかきへし。御母ひくりをとがす。太政所とき
こゑかやくしうまうとは。けふの御ことはいつくしぬくまゐらし。お
ほさまかふひ殿人ぬ御かぐく。夜ふる月給さましてくうみそら
なるよ出やかめき月のひかり虫のとぶうそぞれかし。たまふも。されぞ
みや。小の政所とかしづかれたてまつれる糟糠の御妻ぞかし。貴より
くらし給もぬもなされりかさしけるし。なりけまゐれ御ことは露
出えせざりきまつりをそえ。今も出さやありしく。万の人とめぐ
このどうりをぐし給ひされば。臣らふ人くもきこえつゝ。あさましかよ
御あふりひかりまかし。文王の太姒もかむるまみや。されば君子のよれ
たぐひなるべし。栄花物語の一條院の御代のこと。昔中宮。女御。更衣など
どれ御あるさまよるあえそれの御調度まくいとしうみがられせう
みことくしくかれなし。御車殿の法性寺をさし。あくいひされど。
それへてしれかどれもなく人い。まれ世のめぐられを。衛門のうちよこんせ
まくまくかゞいとしくあぢ事。げみ出もくも赤染あうしんと。おゞ
まれ。やまとうこれまぜ給ふ出くみく。表紙のきよふうつうおも

ひとしく世に法けまれ御口をとゞてこゝら世にしくまりけん。まことに
月花もおりて世にられべき時なれや。ひとしく見めぐりをとりせ給へる。それ竹
の子より御名、花のみやこの殿に聚楽、世におゆらてひゞきのとし、我
かしこれいますかとなるべし。我こゝろをそしてふるとし
ひさしふように世ろうれるとの給ひし。御荒びはけさせ、くだり給
まんべき日をさしてきこゆればとをれ国くようもまつりけれども、此
御室をうけとりさらぐ大和にも唐にもさることもありなんや。上
らぬことに世をよろこぶ事ぞえず、国とくよろこぶことかぎりなし。
いまれむかし、おごりなりける事なりけりや。そもこゝろこゝろの世
をんのことくさみ、国成子よ申しん。かひろうあるら様ど。事ことをしれ。
なぞ、いふもこゝろ深えぬまゝざあらんめりけし
なちう入れるてそあれ思ひつるこは世あえのきしかされ事り
世りひはまれるしのぶくされ法西ゆりり千々にひとれをぞふえうれしら
ぬ老くちは、なよのつけれりとぞ　長嘯

○傳教大師　俗姓は三津氏志賀郡の人なり。名は最澄と云。其先は後漢獻
帝の裔なり。日本應神天皇の御宇此國に來りて滋賀郡をたまはりける。
最澄は其子孫百枝といふ人の子なり。神護景雲元年の誕生、幼して聰明

因奇異人を賛嘆せしむ。十二歳にして大安寺行表法師を師として得度を
延暦二十三年に入唐求法の勅を蒙り、遣唐使菅原清公に従ひ唐の德宗
の朝に至る。台州に赴き天台山に登り、國清寺道邃和尚に一心三觀の玄旨
を授り、行滿順曉などに見へ三部灌頂密教又陀羅尼經書印契圖像又
達磨の一流牛頭山の法をも得て、延暦二十四年に帰朝し、天台諸の教文を
天子に献ず。此ゆゑに勅して悉く書写し七ヶの寺にも配ち、猶か給ひき
より天台又真言密宗本朝に始り、叡山一乗止観院を草創し、弘仁十三年六月
四日中堂院にて遷化ある。年五十六、貞観八年傳教大師と謚を賜ふなり
　叡山延暦寺の号は年号をとりて勅許せらる。中堂建立の時大師の詠あり、新古今に撰らる
阿耨多羅三藐三菩提の佛たち我たつ杣に冥加あらせ給へ

○獺沼貞宗　元應延武の比なり。高木に住居してる木慈四郎といふ又桜本
といふ氏にも住めり。三十又歳の時桐原にありて政宗の弟子となる。弘光く
號せり。弟子数多ありて諸国に遠緑を世外有國。勢田五郎・光包など皆
國中巨魁の好手なり

○大石玄良　内藤所良雄が祖之名を大なりと呼て大石村の人なり。大石と号へるは山口
玄蕃頭江君を知れの時より此に始て世家を大石仲といふ。大石三郷の内中村に居
故に郎太村浄土寺は大石三家の菩提所之。[illegible]大石三家の祖を回

登る元政

享延紀行

々人は信濃までとつかみ
御壺の奉紙と申しん
ゆかくとまうして宿も
あらしとつかみ金谷と
泊れば暮々に富士の
雪ふるに魯論乃
ふとばをもてよ
やれとつかを人
さうだやとつかが
ひろう其雪
それと見んく
あふげば尊とし
ありがたく
いよく高し
ふじの白雪
廿一日暁おきうて母の
後いつくし行山と升奏

内閣

原義を秀郷として多種の子孫平氏源氏藤原の物いふまで
郷の孫なれ国をとゝ治義の苦源三位頼政が嘗を拒む世不を今国の
濃とつひく石ゝの南之兄男石三郷の入口之又男石の渡しい郷の孫なれの南て後
ゝ大石ゝ改む浜七郎良遠俗を兄もゝみ稜が来ゝ嫡家を大石三郎を湯とつひ
橘谷上神職之二男を仲とつゝ兄大石良雄等か初ゝ三男を彰ゝとて一家と
三兄も浅野家へ仕へゝ松家義勝郷拓本谷へ御移の所大石三郷の備立を
石て供奉せり天文の一乱より大石嘗討死してゝ孫元威を河内小山金右つ
とつゝ於る小山頼政が来てゝ秀郷の孫大石ゝ国流ゝるを絶て小山絶ゝて
大石金右つと称し其後代々三てゝ金右つゝ子兄と久右つゝ玄良ゝを其い
子を国郡の良脇又乾母良重ゝを玄其ゝ子稜内良曲ゝを其ゝ子内郡の良雄
久右つゝ玄良が弟い平右つ良接其ゝと八右衛良純其ゝ三郎良勝とつゝ
西家ゝも浅野家へ仕へゝり此流今京師へ移住ゝ仲原家ゝとつひく今ゝ
牛郷大石にもあり

○僧元政　母い石ゝの産之ゝい道種治湯の人元政姓い世官原氏い石母元和九
年癸亥二月廿三日治の一家へ生る小字を後ゝつゝ波嶽聰明番通の振ゝみ
ゝ異之ゝ立い嶽ゝて初て書と漢兄元秀いゝ小芙根の蛾を中拓母伊歩歩ゝ
事ゝ後八嶽ゝて武を兄の家へ学ぶ十三嶽直巻拓て左右へ侍せらる